

中国農民の生活と意識

—— ウイグル族と漢族との比較 ——

島 久 洋

日本はモンスーン地帯に属しております。モンスーン地帯の特色の一つは、雨が夏季に集中して降ることです。それは単に植物の繁茂に適しているばかりでなく、稲作を可能にしてくれるのであります。そのため日本民族は農耕一本やりで、過去に牧畜の経験がないという、世界でも珍しい民族であります。

中国はどうかと申しますと、やはりモンスーン地帯に属しているのですが、北と南とではだいぶ事情が違っております。中国の北と南の分かれめになるところは、ちょうど黄河と揚子江の中間あたりでありまして、ここを境として気候や風俗人情がたいへん違って来るのであります。南半分は気候なども日本に似ており、夏に多くの雨が降り、稲作の農業をやっているのであります。

ところが黄河の流域を中心にした北半分は、モンスーン地帯にありながら雨が少なく、年間の雨量は600ミリくらいで、これはヨーロッパなみであります。世界でも半乾燥地域のうちに入りますから、この点だけから申しますと農業不適地ということになります。

しかし、やはりモンスーン地帯に属しているために、その600ミリの雨が夏に集中して降るのであります。六、七、八の三カ月の雨量だけをみると、日本の雨量とほとんど変わりません。これがヨーロッパと華北の違うところで、それだけ農業にとっては有利になります。

さらに都合のよいことは、華北は黄土の地帯なのでありますが、この黄土は無機の塩類を含んでおり、水量さえ適当にあれば、たいへん肥えた土になるわけであります。

したがってヨーロッパに比べれば、はるかに農業に適した土地であるといえます。

とはいえ、米を作るだけの雨量はありませんから、作物の種類はヨーロッパと同じく、麦や粟などの雑穀を作ることになります。そうすると、ヨーロッパほどではありませんがやはり牧畜の必要が起こってくるのであります。中華料理というのは要するに豚料理だという人もありますが、昔から日本人よりも動物の肉を食用にすることが多かったわけです。

こういうわけで、中国の風土は全体としては農耕に適しているわけですが、部分的に牧畜的な要素が入りこんでいるのが実情であります。日本と中国との文化には、いろいろな点で違ったところがありますが、その一つの原因として、この牧畜的要素の有無ということが働いているかもしれないのであります。（森 三樹三郎 1988 中国文化と日本文化 人文書院 Pp.20-21.）

中国大陸は広大であり、至るところに無辺の農地が存在している。各地の市場には、多種多様な野菜果物が所狭しと溢れんばかりに置かれている。

本報告は、華北と華南という文化的社会的風土の異なる地域における中国農民の生活状況についての実地調査報告である。中国は農業の国であり、農民人口が圧倒的に多いので、本報告の調査対象者数に基づく知見が、いくぶん事例研究的解釈になるのは否めない。

具体的には、華北の西北辺境に位置する中華人民共和国新疆ウイグル自治区にある代表的なオアシスで、長命者の多いホータン（和田）地方のウイグル族農民（島，1990a）と華南の典型的な穀倉地帯で、栄養と疾患に関する1985年中日共同研究によれば栄養状態が中国一良い広東省広州南郊の番禺県謝村の漢族農民との家族状況を中心とする生活の現況と彼らの意識とを比較報告する。

ホータン地方は、中国共産党の支配が確立してからの熱心な植林作業と水利灌漑施設の整備により、耕地面積が解放前の10倍以上に増えたそうである。街路の両側には二重三重のポプラ並木が整備されており、農地の周辺にも多くの木々が植えられ、微粒砂塵と強風の害を防いでいた。

謝村は、伝統的で典型的な華南の農村地帯であり、豊富な水を利用した水路と耕地が無辺に広がり、米の二期作や亜熱帯作物の栽培が盛んに行われており、今だに水牛が活躍する土地でもある。その風景は、広東省から西南方面にかけて南シナ海を包み込むように広がっているインドシナ半島やマレー半島まで続く南方特有の田園風景を醸し出している。

なお、農民も含めたウイグル族の調査結果の概要は既に報告済みである（島, 1988, 1990b, 1991）。

ここで注意しておくべきことは、中国大陸の政権が共産主義を国是としており、当然土地はすべて原則として国有地であるということである。

方 法

調 査 地 区

ウイグル族農民は、中華人民共和国（以下中国と略す）新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠のほぼ西南端に位置するホータン（和田）地方の人々である。ウイグル族は新疆ウイグル自治区の少数民族中で最大人口を擁するが、とくにホータンは人口の95%をウイグル族が占めている。麦や粟などの穀類、種々の野菜類、そして豊富な果物類を産し、さらに綿や桑の栽培が盛んな農耕地帯である。気候は雨量が少なく、強風がよく吹き、砂塵が舞う、まさに“土”の地帯である。



図1 中国での調査地域 注：●印の2地区が実地調査地方

漢族農民は、中国広東省番禺県謝村の人々である。謝村は広州と香港のほぼ中間に位置する豊かな穀倉地帯で、温暖な気候の田園地方である。

具体的な調査実施場所は、ホータン地方がトシャラ（吐沙拉）人民公社事務所（現在は、“人民公社”が廃止されて、“郷”に変わったが、土地の人々は今でもそう呼んでいた）、謝村は謝村衛生所である。調査対象者は各場所へ来訪し面接調査を受けた。一部野外調査も行った。

調査対象

ホータンと謝村の調査対象者の中から農業に従事している人々を抽出して分析した。男女ともに農業に従事している人々である。これらの人々は、す

表 1 中国農民の調査対象者

調査地域		男 性	女 性	計人数
新疆維吾爾 自治區 ホータン地方 (和田) 1988年9月 調 査	人 数 年 齢 層 中 央 値 民 族 名	39 50－55歳 53歳 維吾爾族	55 50－55歳 52歳 維吾爾族	94
広東省番禺県 謝 村 (広州南郊) 1989年4月 調 査	人 数 年 齢 層 中 央 値 民 族 名	82 49－55歳 52歳 漢 族	93 49－54歳 52歳 漢 族	175
計人数		121	148	269

べて成人の50歳代前半の中年男女である。男・女別と地方別の対象者の詳細は、表1に示す通りであり、総数269名である。

調査時期

ホータンは1988年9月15日から同19日までの5日間、謝村は1989年4月20日から同28日までの9日間、それぞれ滞在し実地調査した。

調査項目

まず、フェース・シートで、氏名、生年月日、性別、居住地域、民族名、そして宗教を尋ね、次いで各質目に入った。

質問項目は、全部で32項目であり、既に報告してある（島, 1990b ; Pp. 7 - 10, 1991 ; Pp. 52 - 53）が、大別すれば、職業と住居状況、家族関係、食事形態、健康状態、および日常生活についての質問である。

なお、実地の面接調査では、すべて中国（北京）語の質問紙を用いた。

調査手続

まず、質問項目および質問の意図を、日本語－中国語の日本人通訳に筆者が詳しく説明した。次いで彼が、中国人の補助者に説明した。さらに両氏が、ホータンでは中国語－ウイグル語の通訳に、謝村では中国語－広東語の通訳に説明した。その間、つねに筆者が立合った。両地方での調査は、現地語を解する通訳が中心となって面接を行い、回答事項を質問紙に記入した。筆者は面接中、被験者を観察し、面接終了後、質問紙を点検して不備な点があれば、通訳に指示して補足面接を行わせた。また、面接時間は、通常約30分である。

結 果

ホータンの人々は全て平屋に住んでいる。枠組みに木を用いた土の家屋である。それに対して謝村では、男性の53名（64.6%）と女性の58名（62.4%）が平屋住いであり、男性の29名（35.4%）と女性の33名（35.5%）が二階建家屋に住んでいた。また、2名（2.2%）の女性は三階建家屋に住んでいた。

同居人数は、1名から12名に渡っているが、地区別（ $F < 1$, $n.s.$ ）および性別（ $F = 2.32$, $n.s.$ ）に関係なく、平均約6名弱である。

表3に示すように、両民族の農民は原則として大家族制であり、ホータンでは女性の数名が夫婦だけであり、男性の約8割弱と女性の約5割強が2世代同居であり、他は3世代同居である。謝村では、数名の独身者を除き、男

表2 家族（同居）人数の平均と標準偏差

地域		男 性	女 性	計
ホータン	<i>N</i>	39	55	94
	平均人数	5.79	5.35	5.53
	標準偏差	1.98	2.60	2.36
	人数の幅	3-10人	1-12人	1-12人
謝村	<i>N</i>	82	93	175
	平均人数	5.63	5.39	5.50
	標準偏差	1.80	4.84	1.82
	人数の幅	1-10人	1-9人	1-10人

表3 家族は何世代同居か？

地域		男 性	女 性	計
ホータン	独 身 (%)	0 (0)	1 (1.8)	1 (1.1)
	夫婦だけ (%)	0 (0)	7 (12.7)	7 (7.4)
	二世代同居 (%)	30 (76.9)	28 (50.9)	58 (61.7)
	三世代同居 (%)	9 (23.1)	19 (34.5)	28 (29.8)
	計 (%)	39 (100)	55 (100)	28 (100)
謝村	独 身 (%)	3 (3.7)	4 (4.3)	7 (4.0)
	二世代同居 (%)	63 (76.8)	72 (77.4)	135 (77.1)
	三世代同居 (%)	16 (19.5)	17 (18.3)	33 (18.9)
	計 (%)	82 (100)	93 (100)	175 (100)

女とも約8割弱が2世代同居であり、他は3世代同居である。ただし、両地方とも親族は近くに住んでおり、共同で農作業を行う場合も多い。

両地方の初婚年齢を比較したのが表4であり、性要因（ $F = 135.30$, $df = 1/254$, $p < .01$ ）と地方要因（ $F = 58.05$, $df = 1/254$, $p < .01$ ）との主効

果にそれぞれ統計的な有意差が認められたけれども、交互作用には有意差が認められなかった。

表 4 初婚年齢の比較

地域		男 性	女 性
ホー ー タ ン	人 数	39	55
	平均年齢	20.62	16.58
	標準偏差	3.51	2.99
	年齢の幅	14－30歳	12－23歳
謝 村	人 数	76	88
	平均年齢	26.51	22.69
	標準偏差	4.22	4.38
	年齢の幅	18－42歳	14－42歳

注：未婚者と無回答者は除いてある。

この結果は、ホータンの方が謝村よりも約6年早婚であり、男女で約4年の年齢差が認められることを示している。

表 5 配偶者の年齢の比較

地域		男 性	女 性
ホー ー タ ン	人 数	37	45
	平均年齢	42.78	63.69
	標準偏差	6.46	10.15
	年齢の幅	25－55歳	46－90歳
謝 村	人 数	64	65
	平均年齢	47.05	55.75
	標準偏差	4.75	4.13
	年齢の幅	34－57歳	49－71歳

注：未婚者と配偶者が死亡した者および無回答者は除いてある。

配偶者の年齢を比較した表と配偶者との年齢差を比較した表とが、それぞれ表5と表6である。これらの結果は、謝村よりもホータンの方が夫婦の年齢の差が大きく、ホータンの女性は若い頃に平均10歳以上年上の男性と結婚することを示している。

表 6 配偶者との年齢差

地域		男 性	女 性
ホー タン	人 数	37	45
	平均年齢差	-9.49歳	+11.29歳
	標準偏差	6.06	9.96
	年齢の幅	-25～+1歳	-7～+39歳
謝 村	人 数	64	65
	平均年齢差	-5.11歳	+3.29歳
	標準偏差	4.68	4.01
	年齢の幅	-19～+4歳	-4～+18歳

注：年齢差は本人が中心であり，本人より配偶者が若い場合は－，年を取っている場合は＋になる。

また，未婚者と配偶者が死亡した者，および無回答者は除いてある。

“あなたは今まで，何回結婚されましたか。”という質問に対するホータンでの回答を表 7 に示す。結婚回数は男女とも 1 回から 5 回までの幅があり，平均は男女とも約 2 回であるが，女性の方が男性よりも若干多い。

表 7 ホータン農民の結婚回数

地域		男 性	女 性	計
ホー タン	人 数	39	55	94
	平均回数	1.97回	2.24回	2.13回
	標準偏差	1.11	1.19	1.16
	回数の幅	1－5回	1－5回	1－5回

また，“今までのあなたの配偶者は何人おられますか。生存者__人，死亡者__人。”という質問に対するホータン農民の回答を示したのが，表 8 である。分散分析の結果，生死要因の主効果（ $F=72.30$ ， $df=1/184$ ， $p<.01$ ）と交互作用（ $F=8.64$ ， $df=1/184$ ， $p<.01$ ）とにそれぞれ有意差が認められた。

中国農民の生活と意識

表8 ホータン農民の配偶者の生存者数と死亡者数の比較

		生存者	死亡者	計
男性	平均人数	1.72	0.26	1.97
	標準偏差	0.94	0.59	1.11
	N=39			
女性	平均人数	1.47	0.76	2.24
	標準偏差	0.84	0.98	1.19
	N=55			
計	平均人数	1.57	0.55	2.13
	標準偏差	0.89	0.88	1.16
	N=94			

交互作用に有意差が認められたので、全体の誤差平均平方和を分母として、個々の平均差の検定を行った結果、男性で生存者と死亡者の間（ $F=56.29$, $df=1/184$, $p<.01$ ）、女性で生存者と死亡者の間（ $F=18.69$, $df=1/184$, $p<.01$ ）にそれぞれ有意差が認められた。

生存者に関しては男女間（ $F=1.85$, $df=1/184$, $n.s.$ ）に有意差が認められなかったけれども、死亡者に関しては男女間（ $F=7.93$, $df=1/184$, $p<.01$ ）に差が認められた。

これらの結果は、ウイグル農民の配偶者は生存者（平均1.57名）の方が明らかに死亡者（平均0.55名）より多いことを示している。また、生存者数に関しては男女の間に差はないけれども、死亡者数については男女間に差が認められ、男性の配偶者よりも女性の配偶者の方が死亡者が多いことを示している。ウイグル農民の夫婦の年齢差は開いており、中年女性の配偶者は高齢になるので死亡者も多くなるものと考えられる。

表7と表8に関する質問は謝村では拒否された。“結婚は一回に決まっている”という番禺県当局の強い指示で質問を禁じられた。

地方別の兄弟姉妹の生存者と死亡者の人数を比較したのが表9である。

表9 兄弟姉妹の生存者数と死亡者数の比較

		生存者	死亡者	計
ホータン	平均人数	3.55	1.23	4.78
	標準偏差	2.13	2.16	3.03
	$N = 94$			
謝村	平均人数	3.86	0.84	4.70
	標準偏差	2.37	1.62	2.73
	$N = 175$			

表9に基づく分散分析の結果、生死要因の主効果（ $F = 203.9$, $df = 1/534$, $p < .01$ ）にのみ統計的な有意差が認められた。兄弟姉妹数は、地方に関係なく5名弱（本人を含むと6名弱）であり、1名前後が死亡していることを示している。50歳代前半の農民は、ホータンも謝村も兄弟姉妹数が約6名である。

彼らの子供達の生存者数と死亡者数を比較したのが表10である。表10に基づく分散分析表が表11である。表11に示すように全ての要因に統計的な有意差が認められたので、全体の誤差平均平方和を分母として個々の平均差の検定を行った。生存者に関してホータンと謝村の間（ $F < 1$, $n.s.$ ）には有

表10 子供の生存者数と死亡者数の比較

地域		生存者	死亡者	計
ホータン	平均人数	4.36	1.41	5.78
	標準偏差	2.50	1.62	3.28
	人数の幅	0-12人	0-6人	0-18人
	$N = 94$			
謝村	平均人数	4.49	0.29	4.78
	標準偏差	1.55	0.61	1.78
	人数の幅	0-8人	0-3人	0-10人
	$N = 164$			

表11 表10に基づく分散分析表

変 動 因	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	
A (生・死)	1503.65	1	1503.65	602.67	**
B (地区要因)	28.84	1	28.84	11.56	**
A × B	45.94	1	45.94	18.41	**
誤 差	1277.46	512	2.50		

** $p < 0.01$

意差が認められないけれども、死亡者に関してはホータンと謝村の間 ($F = 30.16$, $df=1/512$, $p < .01$) に有意差が認められた。謝村の方がはるかに子供の死亡数が少ないことを示している。

ホータン ($F = 163.58$, $df=1/512$, $p < .01$) と謝村 ($F = 580.09$, $df=1/512$, $p < .01$) との生存者数と死亡者数との間にそれぞれ有意差が認められた。

これらの結果は、彼らの子供達は、生存者数の方が死亡者数よりもはるかに多く、死亡者数ではホータンの方が謝村よりも約1名多いことを示している。

ウイグル族の子供数は6名弱で彼らの兄弟姉妹数とほぼ同数であるのに、漢族の子供数は5名弱であり、彼ら自身の兄弟姉妹数よりも約1名減少している。ただし、子供の死亡者数は明らかに謝村の方がホータンよりも少ないので、両地方の子供の生存者数はほぼ同数になっている。これは、解放後の両地方の衛生環境の相違がもたらしたものと推察される。

彼らの第一子および現在までの最終子誕生時の年齢を性別と地方別で比較したのが表12である。

表12に基づく第一子誕生時年齢に関して性別と地方別の分散分析の結果、性要因 ($F = 59.81$, $df=1/249$, $p < .01$) と地方要因 ($F = 32.46$, $df=1/249$, $p < .01$) との主効果にそれぞれ有意差が認められたが、交互作用 ($F = 1.05$, $n.s.$) には有意差が認められなかった。これは、初婚年齢 (表4参照) とほぼ対応しており、ホータンの方が謝村より約4年早く第一子が

表12 第一子と最終子の誕生時の年齢

地域		第 一 子		最 終 子	
		男 性	女 性	男 性	女 性
ホー タ ン	<i>N</i>	39	52	38	49
	平均年齢	25.72	20.60	41.53	38.49
	標準偏差	5.80	4.72	4.55	7.57
	年齢の幅	16-40歳	14-46歳	31-49歳	17-48歳
謝 村	<i>N</i>	76	86	75	85
	平均年齢	28.45	24.53	36.89	36.07
	標準偏差	4.15	3.73	3.58	3.36
	年齢の幅	20-43歳	15-37歳	31-49歳	27-42歳

誕生しており、また男性よりも女性の方が約4年強早く第一子を産んでいることを示している。

表12に基づく最終子誕生年齢についての分散分析の結果、性要因 ($F = 9.32$, $df=1/243$, $p<.01$) と地方要因 ($F = 31.19$, $df=1/243$, $p<.01$) との主効果に有意差が認められ、交互作用 ($F = 3.08$, $n.s.$) には有意差が認められなかった。

最終子誕生年齢は、謝村の方がホータンよりも約3年強早く、女性の方が男性よりも約3年弱早いことを示している。

これらの結果は、謝村では出産期間が短いのに、ホータンではその期間が長いことを示している。

ウイグル族と漢族の家族内でのリーダーシップについて報告する。

既に述べた(島, 1990b, p.25)ように、集団維持機能を測定する4項目と課題達成機能を測定する4項目との計8項目のゲスフーテスト形式のリーダーシップテストにより家族集団のリーダーシップを測定した。

全8項目を1人の人間が遂行している機能統一型の家族と、両機能を別の人間がそれぞれ遂行している機能分離型の家族とに大別できる。リーダーシップタイプとして機能統一型と機能分離型とに大別して、地方別と性別の頻度

を示したのが表13である。

表13 家族内のリーダーシップタイプ

		人 数	機 能 統 一	機 能 分 離
ホータン	男 性	39	39(100)	0
	女 性	54	54(100)	0
	計	93	93(100)	0
謝村	男 性	77	55(71.4)	22(28.6)
	女 性	87	69(79.3)	18(20.7)
	計	164	124(75.6)	40(24.4)

注：（ ）内の数は％

ウイグル族の家族は全て1人の人間がリーダーシップを遂行する機能統一型であるのに対して、漢族の家族は、男性の家族の約3割弱と女性の家族の約2割が機能分化を示していた。

家族内のリーダーシップタイプを機能が分化しているか否かで分類すれば以上の様になるが、その内実は単純ではない。家族内の誰が主にリーダーシップを遂行しているかという家族内リーダーシップの分布を調べると、同じ機能統一型でも夫がリーダーの場合や妻がリーダーの場合がある。また、機能分化している家族では、集団維持機能と課題達成機能とをそれぞれ妻と夫が遂行している場合やその逆の場合もあり、決して一様ではない。

家族内リーダーシップの分布を示したのが表14である。機能統一型の単独型は、8項目とも同一人を記入している場合であり、並立型は全項目に2人の人間を同時に記入している場合である。機能分離型は、集団維持機能の項目と課題達成機能の項目とに別の人間を記入しており、両機能を誰が遂行しているかによってタイプを分けた。

ウイグル族の男性の家族はすべて夫自身がリーダーシップを遂行していた。しかし女性の家族で夫が生存している場合の17.8%（8/45）は妻がリーダーシップを遂行していると回答したいわゆる“かかあ天下”の家族である。夫が死亡した家族は、長男がリーダーシップを取っていた一家族を除き、他は

表14 家族内リーダーシップの分布

		人数	機能統一型					機能分離型	
			単独型			並立型		夫・妻 (T)(M)	妻・夫 (T)(M)
			夫	妻	その他	夫妻	その他		
ホー タン	男 性	39	39	0	0	0	0	0	0
	女 性	54	37	16	1	0	0	0	0
	夫・生	45	37	8	0	0	0	0	0
	夫・死	9	0	8	1	0	0	0	0
	計	93	76	16	1	0	0	0	0
謝 村	男 性	77	40	3	0	11	1	21	1
	女 性	87	33	12	2	21	1	18	0
	夫・生	77	33	2	2	21	1	18	0
	夫・死	10	0	10	0	0	0	0	0
	計	164	73	15	2	32	2	39	1

注：ホータン女性（夫・死）単独型の“その他”1は、長男。謝村男性並立型の“その他”1は、夫とその母の並立。謝村女性（夫・生）単独型の“その他”2は、夫の母および夫の妹。同じく謝村女性（夫・生）並立型の“その他”1は、夫と息子。なお、TとMは、それぞれ課題達成機能と集団維持機能とを表わす。

全て寡婦がリーダーシップを遂行していた。

ウイグル族の家族では、両機能は分化せず、夫婦とも健在な84家族のうち76家族（90.5%）は家長の男性がリーダーシップを遂行しているという家父長的な長老支配的傾向を示していた。

漢民族の農民家族のリーダーシップの様相は複雑である。総じて、機能分化と妻の権限の伸長が伺われる。男性77家族のうち夫がリーダーの家族は40家族（51.9%）で約半数であり、妻がリーダーの家族は3家族（3.9%）、夫妻並立リーダーが11家族（14.3%）、夫とその母の並立リーダーが1家族（1.3%）であり、他の22家族が機能分化している。夫と妻がそれぞれ課題達成機能と集団維持機能とを遂行している家族が21家族（27.3%）、夫と妻が

役割を変えて、反対の機能を遂行している家族は1家族（1.3％）である。

夫が生存している女性77家族のうち、夫がリーダーの家族は33家族（42.9％）で半数を割っている。妻がリーダーは2家族（2.6％），その他も2家族である。夫妻が共にリーダーの家族は21家族（27.3％），その他は1家族（1.3％）である。機能分化している18家族（23.4％）はすべて夫と妻とが、それぞれ課題達成機能と集団維持機能とを遂行していた。

夫が死亡した女性の10家族はすべて未亡人がリーダーシップを遂行していた。

被験者は全て農業に従事している農民であるが、各家族の生計を主に担う人についての回答結果から、1人が主に担う家族と2人以上の複数人が主に担う家族とに大別でき、その詳細を表15に示す。ウイグル族の家族では、同じ農業でも単独で生計を担う家族が約9割で圧倒的多数を占めているけれども、漢族の家族では、男性家族で単独タイプが6割，女性家族で5割に減少している。

表15 生計を主に担う人

		人数	単 独 型		複 数 型				
			夫 妻 子	小計	夫・妻	夫・子	妻・子	夫・妻・子	小計
ホータン	男 性	39 (100)	33 0 2	35 (89.7)	4	0	0	0	4 (10.3)
	女 性								
	夫・生	45 (100)	28 10 2	40 (88.9)	2	2	1	0	5 (11.1)
	夫・死	9 (100)	0 7 2	9 (100)	0	0	0	0	0
謝村	男 性	81 (100)	34 6 9	49 (60.5)	12	10	0	10	32 (39.5)
	女 性								
	夫・生	76 (100)	22 5 8	35 (46.1)	18	17	0	6	41 (53.9)
	夫・死	10 (100)	0 2 6	8 (80.0)	0	0	2	0	2 (20.0)

注：無回答者は除いてある。（ ）内の数は、人数に対する小計の％である。

表14と表15を対照すると、リーダーの統一型と分離型の比率が家計の単独型と複数型の比率にかなり対応しており、生計を主に担うことと家族内のリーダーシップを遂行することが関連することが推察されるけれども、その関係の詳細は今後の考察に委ねざるをえない。

字の読み書きに関する結果を表16に示す。ウイグル族はウイグル語であり、

表16 字を読み書きする人

		字 を 読 む		字 を 書 く	
		男 性	女 性	男 性	女 性
ホータン	人 数	18 (46.2)	9 (16.4)	16 (41.0)	7 (12.7)
		39	55	39	55
謝村	人 数	61 (74.4)	13 (14.0)	52 (63.4)	9 (6.7)
		82	93	82	93

注：()内の数は、人数に対する％である。

漢族は広東語である。総じて識字率の低いのが目立っている。漢族男性の7割強は字を読み、6割強は字を書けるけれども、ウイグル族の男性はそれがそれぞれ4割強に低下している。逆に女性に関しては、ウイグル女性の16％は字が読み、13％は字が書けるけれども、漢女性ではそれぞれ14％と7％に低下している。農作業には読み書きは必要ないのであるか？ 両民族の農民におけるこの世代の女性の識字率は非常に低いのである。

次に両民族の農民の身体や夫婦関係についての意見を整理することにする。

まず、身体の調子について“良い(3)” “どちらともいえない(2)” “悪い(1)”の3件法による回答を整理したのが、表17である。表17に基づく分散分析の結果、性要因の主効果 ($F=3.86$, $df=1/264$, $p<.05$) にのみ統計的に有意な差が認められた。すなわち、女性よりも男性の方が調子がより良いと認識しているのである。

自分自身が健康であると思っているか否かという質問を“思う(3)”, “どちらともいえない(2)”, “思わない(1)”の3件法による回答を条件別に整理した

中国農民の生活と意識

表17 身体の調子について

		男 性	女 性	計
ホー タン	人 数	39	55	94
	平 均	2.64	2.49	2.55
	標準偏差	0.67	0.77	0.73
謝 村	人 数	81	93	174
	平 均	2.58	2.37	2.47
	標準偏差	0.67	0.72	0.70
計	人 数	120	148	268
	平 均	2.60	2.41	2.50
	標準偏差	0.67	0.74	0.71

注：“良い”，“どちらともいえない”，そして“悪い”がそれぞれ3，2，そして1の3件法。

性要因（男・女）の主効果に有意差（ $p < .05$ ）が認められた。

表が表18である。表18に基づく分散分析の結果，地方要因の主効果のみ（ $F = 3.86$ ， $df = 1/264$ ， $p < .05$ ）に有意差が認められた。男女を込みにしてウイグル農民の方が漢農民よりもより健康であると思っているのである。

表18 健康の自己評価

		男 性	女 性	計
ホー タン	人 数	39	55	94
	平 均	2.74	2.62	2.67
	標準偏差	0.64	0.73	0.69
謝 村	人 数	82	93	175
	平 均	2.60	2.38	2.48
	標準偏差	0.72	0.85	0.79
計	人 数	121	148	269
	平 均	2.64	2.47	2.55
	標準偏差	0.69	0.81	0.76

注：3件法。地方要因の主効果に有意差（ $p < .05$ ）が認められた。

農作業が面白いか否かという質問を“面白い(3)”, “どちらともいえない(2)”, “面白くない(1)”の3件法で求めた回答を整理したのが表19である。表19に

表19 仕事の面白さ

		男 性	女 性	計
ホータン	人 数	39	55	94
	平 均	2.92	2.58	2.72
	標準偏差	0.35	0.81	0.68
謝村	人 数	78	92	170
	平 均	2.81	2.63	2.71
	標準偏差	0.40	0.61	0.53
計	人 数	117	147	264
	平 均	2.85	2.61	2.72
	標準偏差	0.39	0.69	0.58

注：3件法。性差要因の主効果に有意差（ $p < .01$ ）が認められた。

基づく分散分析の結果、性要因の主効果のみ（ $F = 12.06$, $df = 1/260$, $p < .01$ ）に有意差が認められた。これは地方別を含みにして女性よりも男性の方が仕事をより面白いと思っていることを示している。

次に配偶者との過去の生活について聞いた質問の回答を報告する。

配偶者との過去の生活が，“楽しかった(3)”, “どちらともいえない(2)”, “楽しくなかった(1)”という3件法の回答を整理したのが表20である。表20に基づく分散分析の結果、全ての要因に統計的な有意差は認められなかった。すなわち、男女、地方の別なく、過去の生活を楽しかったと回答した。これは、模範的回答とも考えられるけれども、楽しくなかったと考えることは自分の過去の生活を否定することにもなり、心理的緊張感が高まり、そのような心理状態に長く耐えることができないので楽しかったと思い込むという心理が働く場合が往々にしてあり、必ずしも公式的回答とばかりは言えない。

配偶者との過去の性生活が楽しかったかという質問は、謝村では不謹慎であるという理由で番禺県当局から禁止された。ただし、少数民族のウイグル

中国農民の生活と意識

表20 配偶者との生活は楽しかったか

		男 性	女 性	計
ホータン	人 数	39	55	94
	平 均	3.00	2.93	2.96
	標準偏差	0	0.38	0.29
謝村	人 数	77	81	158
	平 均	2.96	2.86	2.91
	標準偏差	0.25	0.47	0.38
計	人 数	116	136	252
	平 均	2.97	2.89	2.93
	標準偏差	0.21	0.43	0.35

注：3件法

農民の調査では何も言われなかった。この質問に対するウイグル農民の回答を表21に示す。男女間の平均差を検定した結果（ $t = 63.85$, $df = 91$, $p < .001$ ），男性の方が女性よりもより楽しかったと考えていた。

表21 配偶者との性生活は楽しかったか

		男 性	女 性	計
ホータン	人 数	39	54	93
	平 均	2.97	2.83	2.89
	標準偏差	0.16	0.47	0.37

注：謝村ではこの質問は禁じられた。

“あと何年生きられると思うか”および“あと何年生きたいと思うか”という生存の現実的認識と願望の両質問は、農民に尋ねるのは好ましくないという理由で番禺県当局から差止められた。ウイグル族の場合は問題はなかった。両質問に対するウイグル農民の回答を表22に示す。ウイグル農民は、男女とも現実にあと45年前後すなわち100歳近くまで生きられると思っており、願望としてはあと50年すなわち100歳以上は生きたいと考えている。

最初に尋ねた農業継続の年数に関する回答は、謝村では無回答者が多くを

表22 あと何年生かれるか・生きたいか

			男 性	女 性	計
ホー タ ン	生 き ら れ る か	人 数	38	55	93
		平均年数	44.3年	46.1年	45.4年
		標準偏差	34.3	34.7	34.4
		年 数 幅	10-100年	5-100年	5-100年
	生 き た い か	人 数	38	55	93
		平均年数	50.1年	51.4年	50.9年
		標準偏差	30.5	32.4	31.5
		年 数 幅	20-100年	8-100年	8-100年

注：謝村ではこの質問は禁じられた。

占めていたが、その理由は確定できない。参考までに両地方と男女別の回答を表23に示す。継続年数は謝村よりもホータンの方が数年長くなっているが、死ぬ迄続けるという回答は明らかにホータンよりも謝村の方が多くなっている。

表23 あと何年仕事を続けたいか

		男 性	女 性	計
ホー タ ン	回答人数	35	41	76
	平均年数	15.8年	11.8年	
	標準偏差	7.8	6.8	
	年 数 幅	6-30年	2-29年	
	死 ぬ 迄	1	3	4
	退 職 者	2	10	12
謝 村	回答人数	26	21	47
	平均年数	11.5年	8.0年	
	標準偏差	5.2	2.8	
	年 数 幅	0-19年	2-16年	
	死 ぬ 迄	11	9	20
	退 職 者	2	3	5

最後に、宗教については、ウイグル農民が敬虔なイスラム教徒であり、男女とも全ての農民が毎日数回欠かさず礼拝していた。ホータンには多くの礼

拝堂があり、宗教活動も活発に行われていた。

謝村では、“全て無宗教である”という理由で宗教に関する質問を番禺県当局から禁じられた。ただし、各家庭では道教のお札を張った扉や家具類が頻繁に見受けられた。

考 察

ウイグル農民と漢農民の家族構成の結果は、数的には極めて類似した結果を示している。両民族の農民ともに大家族であり、2、3世代同居が多く、家族数も平均約6名である。農業を維持するのに必要な家族数なのかも知れない。

また、兄弟姉妹数や子供数も類似している。50歳代前半の農民の兄弟姉妹数は両民族ともに平均6名位である。子供数はウイグル族では約6名であるが、漢族では1名減の約5名である。ただし、子供の死亡者数が謝村の方が明らかにホータンよりも少なく、生存している子供数は両民族ともに平均約4.5名である。

この世代の親の死亡原因を調べた調査結果によれば、ウイグル族の場合は、胃腸病系統による死亡が割合多いのに対して、謝村では両親または片親が日本軍に殺された農民がかなりみられたことが注目される。一見のどかな田園風景の中にも戦争の爪痕が刻まれていた。

家族構成の数的側面は両民族で類似していたけれども、その内実はかなり異なっている。

たとえば、リーダーシップに関しては、ウイグル族の家族では両機能は分化しておらず、家父長的な長老支配の傾向を示し、夫婦が健在な家族では家長の男性がリーダーシップを取っていた家族が多い（9割）。また、配偶者（夫）が死亡した家族では、長男がリーダーシップを取っていた一家族を除き、寡婦がリーダーシップを遂行していた。

それに対して漢農民の家族では複雑であり、夫婦健在の家族のうち約半数が夫の家長がリーダーであったが、他は妻がリーダーであったり、夫婦並立

型リーダーであったり、夫が課題達成機能を妻が集団維持機能をそれぞれ遂行する機能分離型であったりしていた。

ウイグル家族よりも漢家族の方が家族内リーダーシップ機能の分化が進んでいると共に妻の権限の伸長が著しいのである。

次に識字率については、両民族ともにあまり高くなく、とくに女性が極端に低いのが目立っている。漢族女性の字を書ける人々はただの6.7%であり、ウイグル女性よりも少ないのである。中国の農村では、女性は字を読み書きしなくても日常生活に何ら差支えないのが現状なのであろう。

身体の調子と仕事の面白さについては、両民族に関係なく、女性よりも男性の方がより調子が良く、面白いと回答していた。また健康の自己評価については、漢族女性の数値が低いのが主な原因で漢族よりもウイグル族の方がより健康であると回答していた。漢族農家で主婦に肉体的負担が重くのしかかっているのが伺える。

宗教と性に関する質問および“あと何年生きられるか？”また“あと何年生きたいか？”という質問は、調査の打合せを行った時に、番禺県当局から断固として拒否された。政治的に好ましくないというのが根本の理由である。調査を行った1989年4月下旬は、すでに北京天安門で学生の集会が始まっていた頃である。地方行政当局が神経を尖らせていたのも無理はない。

ウイグル族と漢族の調査は、時期的に8カ月位の隔たりがあるけれども、それを考慮しても、ウイグル族の方がのんびりしており、時間の観念、人間関係、男女関係の全てにおいて悪い意味ではルーズであり、良い意味では大様である。

要約すれば、謝村の方がホータンよりも中央政府の方針がよく行き渡っていた。新疆ウイグル自治区では、“漢民族は少数民族を離れず、少数民族は漢民族を離れず”という標語が頻繁にみられ、表面的には中央政府が少数民族に及び腰の様にみえたが、実際には漢民族が支配している様子が随所に伺われた。ウイグル農民は伝統的な長老支配の家父長的家族形態を維持しており、ゆったりした人間関係の中に生きている。これに対して漢民族の農民は、

中国農民の生活と意識

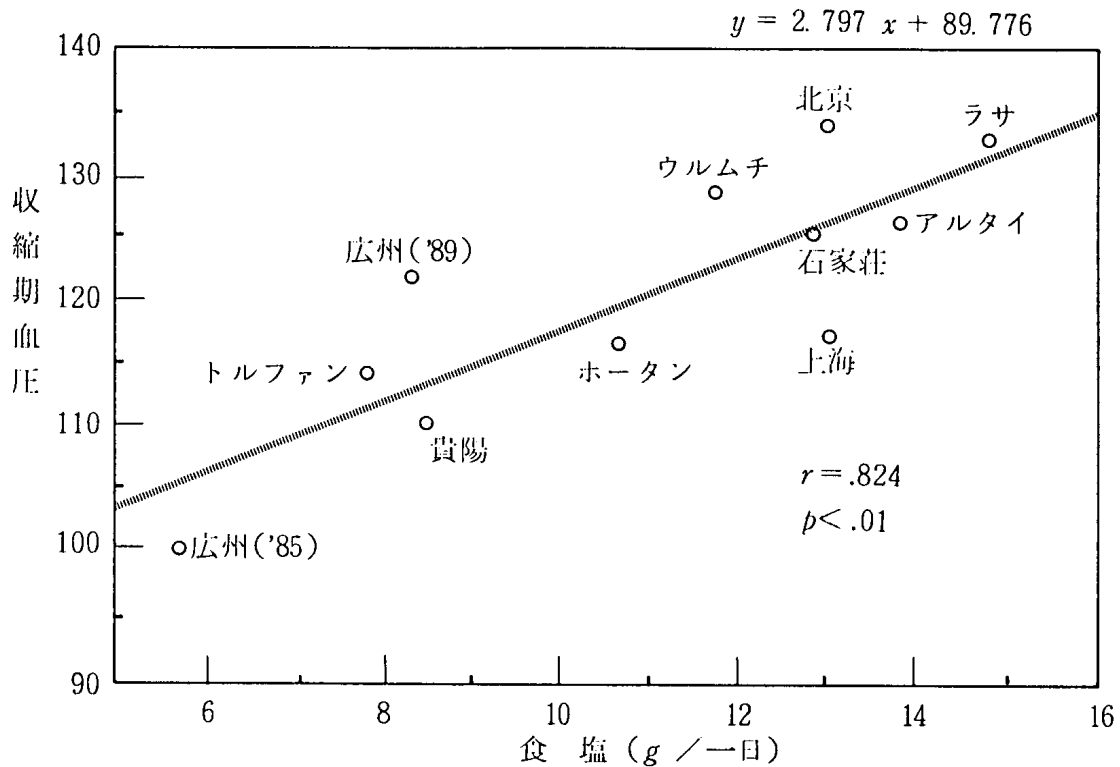


図2 収縮期血圧と食塩摂取との関係
(日中WHO - CARDIAC研究による)

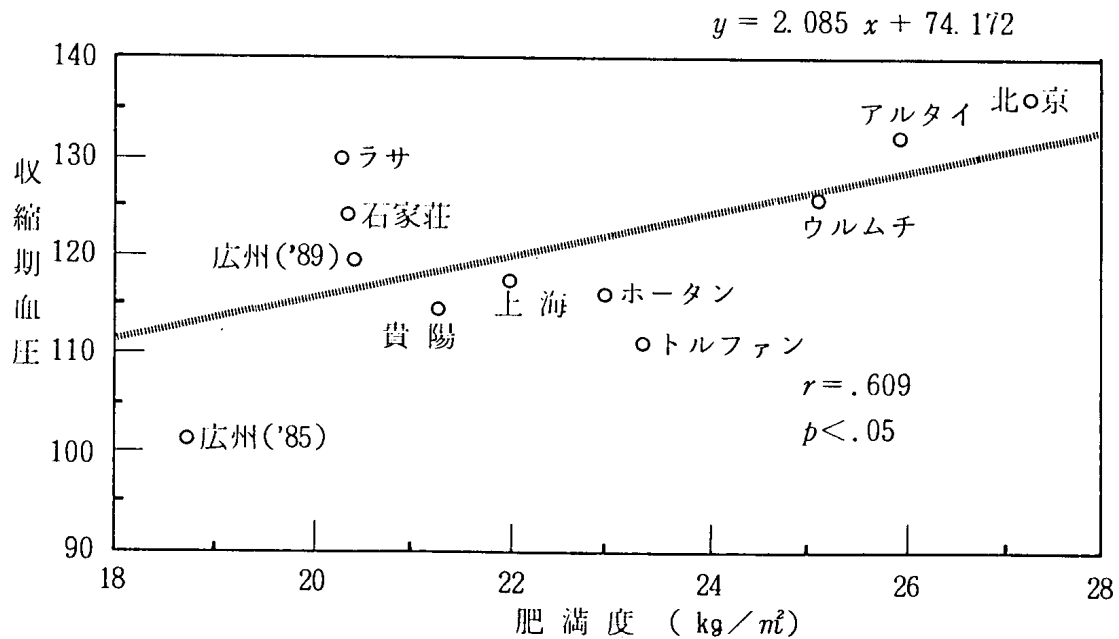


図3 収縮期血圧と肥満度との関係
(日中WHO - CARDIAC研究による)

家族内での女性の実質的権限が著しく伸長している。1989年当時は、夫達が都市（広州、上海など）へ出稼ぎに行き妻達が田畑を守り、残った家族を養わざるをえないのが現状である。それゆえ、妻達の負担は重く、彼女らの健康状態も数年前の1985年に比べればかなり悪化していた（図2，図3参照）。近代化は必ずしも健康に益をもたらすものではない。

引用文献

- 島 久洋 1988 中華人民共和国新疆維吾爾自治区における維吾爾族と哈薩克族との比較——特に宗教と家族関係について——島根医科大学紀要 第11巻, 1-23.
- 島 久洋 1990a シルクロードに長寿の里を求めて, 家森幸男・島久洋編 長命から長寿へ——新しい世紀のいのち; WHOリポート ナカニシヤ出版 pp.61-87.
- 島 久洋 1990b ウイグル老人のリーダーシップ——中華人民共和国新疆維吾爾自治区における維吾爾族と哈薩克族の比較——桃山学院大学・国際分化論集 No. 3, 1-38.
- 島 久洋 1991 中華人民共和国新疆維吾爾自治区における維吾爾族と哈薩克族との日常生活に基づく健康な長寿のための心理社会的要因——特に食習慣と日常生活に対する態度について——桃山学院大学・人間科学 No. 2, 47-82.

(しま・ひさひろ／文学部／1991. 4. 30 受理)

中国農民的生活與意識

——維吾爾族與漢族的比較——

島 久 洋

概 要

這篇研究以新疆和田地區的維吾爾族農民與廣東省番禺縣謝村的漢族農民的家族狀況為中心，比較其間的日常生活現況所作的實地調查。

調查對象皆是50歲代前半的農民，計維吾爾族94人（男39人，女55人），漢族175人（男82人，女93人），共269人。

調查期間 和田是1988年9月15日至19日的五日間，謝村是1989年4月20日至28日的九日間。

調查方式 先以漢語印刷成表，計分32項目。和田以漢語－維吾爾語，謝村則是漢語－廣東語，即以翻譯為主舉行對面調查。

中央政府的方針，謝村遠較和田普及。在新疆維吾爾自治區可以頻繁地見到「漢族不離少數民族，少數民族不離漢族」的標語，表面上中央政府對於少數民族待以彎身曲腰的姿勢，其實到處可以見到漢族支配的形勢。維吾爾族的農民保持傳統的長老支配的家父長式的家族形態，而生活在舒暢的人際關係之中。相對地，漢族的農民，婦女在家庭內顯著地爭長實質上的權限。現今（1989年當時）的狀態是，丈夫外出掙錢（廣州，上海等地），妻子守住田產養育其他的家族。因此妻子的負擔漸重，健康狀態遠較1985年惡劣。現代化不一定能為健康帶來好處。

Daily Lives and Ways of Thinking of Chinese Peasants — Comparison by the Uigur and the Han Nationalities —

Hisahiro SHIMA

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate nutritional and psychosocial conditions in two ethnic populations of Chinese peasants.

We studied 1 Uigur population in Hetian in September of 1988 and 1 Han population in Guangzhou in April of 1989. Study populations were 269 males and females ages 49–55 randomly selected from each population.

The questionnaire consisted of 32 items relating to family relations, eating habits, daily lives, healthy conditions, and religious behaviors. The survey were conducted by face-sheet methods in the field or indoors.

The significant of these results was discussed.